大学生の英語学力調査
—学習者はどこでつまずくか—

佐藤敏子
中川　武
山名豊美

1．目的

1998年12月14日告示，2002年4月より施行の「中学校学習指導要領—外国語」（以下学習指導要領）では次の目標を掲げている。

「外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。」

この目標を達成するために「言語活動の取り扱い」として「コミュニケーションを図る活動においては，具体的な場面や状況に合った適切な表現を自ら考えて言語活動が出来るようにすること。」とし，「言語材料」として「文法事項」は以下の9項目に分類している。

（ア）文
（イ）文型
（ウ）代名詞
（エ）動詞の時制など
（オ）形容詞及び副詞の比較変化
（カ）to不定詞のうち基本的なもの
（キ）動名詞のうち基本的なもの
（ク）現在分詞及び過去分詞の形容詞としての用法
（ケ）受け身のうち現在形及び過去形

さらにこの取り扱いについては「用語や用法の区別などの指導が中心とならないように配慮し，実際に活用する指導を重視するようにすること。」と指導上の注意を加えている。

今回の調査目的は，英語が苦手な大学生が英語学習の基礎である中学校の学習内容の中で，学習者が困難を感じるのはいつ頃なのか，またどのような内容なのかを明らかにすることである。そのために，今回の調査結果を上記「中学校学習指導要領」に照らし合わせ，(1)学習者がどこでつまずき，(2)そのつまずきの主たる原因は何か，(3)大学の英語教育で学習を続けていくためには今後どの

ような工夫が必要か，以上の３点を明らかにしていく。

２．調査方法

多くの教員が教材選択の難しさに直面している。その解決策のひとつとして，今回大学生が中学校の学習内容をどこまで理解しているのか，どこでつまずいているのかを調査することが必要と考え，以下の内容及び手順にて学習調査を行った。

(a)　学習調査項目

中学校用検定教科書 *NEW HORIZON English Course* 1～3（東京書籍）から各課のターゲットセンテンスを基に全12回分（計104問）の「並べ替えテスト」を作成し，各授業時間の一部を充て実施した。並べ替えを指示したパーツ数は１文につき最小で３，最大で５となっている。

(b)　被験者

４年制大学１年生125名で調査を開始した。対象の学生集団は英語を専門としない学部学科に所属している。また入学直後に実施したプレイスメントテスト（日本英語検定協会作成・英語能力判定テストＣ）の結果により，上位群と下位群にクラス分けされた。（１クラスあたり24名～27名）。また本プレイスメントの結果から，学習者群がほぼ正規分布になっていることが確認された（巻末資料「英検テスト」ヒストグラムを参照）。全12回の学習調査（並べ替えテスト）を全て受験した学習者のみを分析の対象として抽出した結果，被験者数は上位群53名，下位群72名となった。

３．調査結果

全問題項目の内容（ターゲットセンテンス）及び正答率については巻末資料を参照のこと。

(a)　全体（表１）

以下，被験者全体の正答率が低かった項目を順に示す。全104項目の配列は中学校での学習項目順に従ったので，後半の項目で正答率の低さが目立つ。特に下位群では正答率が10％未満の項目が続く。（参考までに本章では問題項目（並べ替え前）を，次章以降では学習指導要領における学習項目との照合を容易にするため，並べ替え後の文を示す。）

表１　正答率の低かった下位５項目（全体）

項目番号	正答率 全体	正答率 上位群	正答率 下位群	差
99	0.02	0.04	0.01	0.03
74	0.09	0.17	0.03	0.14
97	0.15	0.25	0.08	0.17
102	0.18	0.34	0.06	0.28
58	0.19	0.28	0.13	0.15

(99) the people operators answering are the telephones.
(74) popular watching is soccer games.
(97) Japanese it is to understand for me difficult.
(102) wrote the scientist Carson is who Silent Spring.
(58) a computer play games I use to.

分析の詳細は後段に譲るが，これらの項目の正答率が低かった原因を「文法項目の習熟度」を反映した結果と早急に結論付けることには問題が残る。今回の調査項目は検定教科書の原文を採用したが，文脈を一切排除した状態で(99)や(74)のような文をそのまま出題したことが，調査の手法上適切といえないことが明らかとなった。(102)についても人名や内容の難しさに焦点があたってしまい，本来の目的であった「関係代名詞の用法」を問うことが副次的な要素になってしまっている。下位群の極端に低い正答率を見る限り，正しく並び替えた後の文でさえ理解が難しいのではないかと予測される。ただ(102)においては上位群で中程度の正答率が見られることから，仮主語構文を正しく理解し，また組み立てられるかという統語能力に起因する差と解釈できる。明解な分析を試みる上で，問題項目の作成には細心の注意を払う必要がある。(検算としてカイ2乗検定を実施した結果，(99)では有意差が出ていない。巻末資料参照。)

(b) 上位群と下位群の差（表２）

以下は両群の差に着目した結果である。全データをクロス集計（上位・下位群内における正答者数及び誤答者数を算出し，カイ２乗検定を実施）し，指数が高い項目（以下全て優位傾向は１％水準。df ＝ 1）から順に配列した。

表２　両群の差が大きかった上位10項目（指数による）

項目番号	正答率 全体	正答率 上位群	正答率 下位群	差	カイ２ 乗指数
62	0.51	0.81	0.29	0.52	32.99
24	0.30	0.57	0.10	0.47	32.20
68	0.48	0.77	0.26	0.51	31.77
86	0.61	0.89	0.40	0.49	30.01
73	0.52	0.79	0.32	0.47	27.37
77	0.51	0.77	0.32	0.45	25.20
29	0.62	0.87	0.43	0.44	24.69
89	0.41	0.66	0.22	0.44	24.27
104	0.45	0.70	0.26	0.44	23.28
75	0.57	0.81	0.39	0.42	22.20

(62) [show] [will] [her picture] [I] [you].
(24) [pen] [use] [this].
(68) [because] [Tom] [he is] [I like] [kind].
(86) [Mike] [Keiko has] [for a long time] [known].
(73) [this poem] [I] [writing] [finished].
(77) [more interesting] [that one] [this movie] [is] [than].
(29) [time] [is] [what] [it]?
(89) [since] [these girls] [this morning] [here] [have been].
(104) [a book] [she wrote] [this is] [last year] [that].
(75) [Japan] [America] [bigger] [is] [than].

上位群では80％を超える高い正答率の項目でも，下位群では30％程度に留まる傾向があることから，両群の差を決定する要因のひとつと思われる。これらの項目には特に難解な内容や語彙が含まれないことから，先に指摘した文脈の有無や項目の適切性によって生まれた差ではなく，基本文型の習熟度に起因する部分が大きい。解答の際に必要となる知識は

(62)　SVOO　→　二重目的語構文（助動詞 will の用法を含む）
(24)　命令文
(68)　because を含んだ節及び主文との論理関係
(86)　has＋過去分詞　→　現在完了時制
(73)　finish(ed)＋～ing　→　動名詞
(77)　比較級（more ＋形容詞）
(29)　疑問詞を含む疑問文
(89)　have ＋過去分詞　→　現在完了時制
(104)　関係代名詞 that
(75)　比較級

であるが，これらは英語学習において基本事項であり，特段難解なものではない。それにも関わらず，特に下位群において習熟の遅れが顕著になっている。特に(24)に関して，下位群で“*This pen use.”という誤答が目立ったことは，命令文の習熟の遅れというよりもむしろ英文の組み立て自体に対する理解が著しく浅いことを思わせる。この意味を成さない英文に対して，どんな日本語訳を充てるのか，さらに追跡調査が必要となる所である。比較すると，他の項目も含め上位群については高い正答率を示しており，基本構文への理解が定着していることが分かる。60番台の問題項目は中学2学年中期以降，つまり中学３学年の中間点を過ぎた所で学習する内容であり，この辺りから学習者群の両極化が一層加速する傾向が認められた。プレイスメントテストではほぼ正規分布を示した学習者群が，学習調査結果において偏りを見せた（＝中間層が欠落している）こともその裏付けと思われる。（巻末資料・英検テスト及び学習調査によるヒストグラムを参照。）

4．考察

ここでは９項目の言語材料の中で正答率50％未満の項目を取り上げ，その低い正答率の原因を明らかにしていく。

(1)　文

学習指導要領では「文」は

a「単文，重文及び複文」

b「肯定文及び否定の平叙文」

c「肯定文及び否定の命令文」

d「疑問文のうち，動詞で始まるもの，can, do, may などの助動詞で始まるもの，or を含むもの及び how, what, when, where, which, who, whose, why の疑問詞で始まるもの」（以下疑問文）

の４つに分類されている。今回の調査で正答率が50％未満の項目で，指導上大きな問題があるのが，ｃとｄである。

①　肯定及び否定の命令文

(24)　Use this pen.

(38)　Don't drive fast.

命令文について，中学校での導入方法を考えてみる。“Total Physical Response（TPR）*1” などで学習者は命令文を聞くことはあっても，実際に発話をする機会は聞く機会に比べると少ない。そのため（24）が30％，（38）が22％と低い正答率になることは考えられる。使用した調査用検定教科書ではこれらを「中学1年生」の学習内容としているが，どんなに初歩の英語でも「使わない英語」は定着しないという典型的な例である。

②　疑問文

英語の苦手な学習者と一緒に勉強していると，「つまずく第一のポイントが疑問文ではないか」という教員の直感があったが，今回ここで明らかになった。

(22)　How many pencils do you have?

(31)　Whose bag is this?

(43)　Can we see stars at midnight?

(44)　When can we see stars?

(87)　Have you played the piano for ten years?

(88)　How long have you played the piano?

（22）21％，（31）30％，（43）47％，（44）22％，（87）38％，（88）37％という結果であるが，特に（87）の現在完了形（疑問文）の正答率に対して，同じ現在完了形の文でも（90）Have you ever heard of a greenhouse problem? の正答率が86％，（93）Have you finished your work yet? の正答率が62％ というようにある程度の正答率の高さが見られるのは，どのような理由によるものかを考えなければならない。推論ではあるが，現在完了形のマーカーとして学習者になじみがあり（ever,

yet)，さらに授業での学習者の発話量が上記（87）と比べて，より多いのではないかと考えられる。特に（87）は現在完了の継続を表すが，「継続」を表す文を導入する時に多く使用される動詞は「状態動詞」が一般的で，play を例文として練習することは少なく，従ってこの文を今回の被験者に現在完了形として認識させる場合，play では直感としていまひとつ捉えにくい。このような理由から，３つの文において正答率の差が出たものと考えられる。

疑問文の語順と相まって，学習者がつまずくのが「疑問詞」の問題である。今回の調査結果から，確実に理解できる「疑問詞」は 'what' のみであると推測される。'how many' 'whose' 'when' 'how long' に関しては，その内容を十分に理解していない状態であるが，（'how long' を除いて）どれも中学１学年の学習内容である。

(2)　文型

この項目において，低い正答率を示したのは以下の文である。

①　【主語＋動詞＋目的語】の文型

(a)　主語＋動詞＋thatで始まる節

(66)　I think we have to leave soon.　(30%)

(b)　主語＋動詞＋what などで始まる節

(100) I do not know what you mean.　(43%)

②　【主語＋動詞＋目的語＋補語】の文型

(a)　主語＋動詞＋目的語＋ 形容詞

(84)　The letters make us happy. (42%)

③　その他の文型

(a)　There＋be動詞＋～

(69)　There is a present under the tree. (38%)

(b)　It ＋be動詞＋～（＋ for ）＋to 不定詞

(97)　It is difficult for me to understand. (15%)

(66) に関しては，指導時における I think というかたまり（chunk）とそれに続く「節」という chunk の意識の欠如，さらにこの文型を使った場面での練習不足などが低い正答率の原因と考えられる。導入方法の工夫，特に I hope..., I am afraid... などの同時導入で，学習者の「使える英語感」は高まり，定着率は高くなる。

(100) の低正答率の原因は語順の難しさであり，これは学習指導要領でも「理解の段階」にとどめる内容としている。今回の調査方法として「語・語句の整序問題」という形式を取ったため，この観点を考慮することが出来なかった。今後の調査時の問題点として残される。

(84) については，「主語の決定」「目的語と補語の決定」という難しさに加えて，「目的語と補語の語順」の二重の難しさを学習者に感じさせるところである。「５文型」の指導については，指導法の問題を含めて議論の残るところではあるが，英語の文型の基本であり，日本の英語学習の環境を考えると EFL（English as a foreign language）であることは疑いがなく，今後の学習を継続し，さ

らに学習効果を上げるために必須の内容である，と考える。

(69) の結果については大学の英語教育を担当する教員として「基礎・基本の定着」という点に関して，現在の中学校英語教育に危機感を感じるものである。Raymond Murphy（1991）のテキストでは「単数」の場合，「否定文」，「疑問文」さらに「複数」の場合という順序で解説し，さらに 'it' との違いに言及している。さらに練習問題でも There's の train at 10:30. It's a fast train.（下線部に語を入れる）があり，単に 'There is...' 'There are...' という文型練習に止まらない工夫が見られる。中学校の授業における導入方法を考えると，この部分の練習量が著しく少ないとは考えにくい。一般的な手法として，場所を示す絵や地図などを黒板に貼り，位置や存在を言い表す練習が展開されることで，一定量の学習者の発話も保証されるものと想像される。それにもかかわらず学習内容の定着度が低い原因は，練習方法についての問題，すなわち「場面設定」のまずさが考えられる。上記 Murphy の例文がその解答となっている。

(97) に関して，今回の調査は全104文を使って調査したが，その配列は検定教科書の指導配列順に従っており「97番目」というのは「中学３年次（さらに学年末期）」の学習内容にあたる。「仮主語」，for とそれに続く to 不定詞との関係など内容はより複雑になり，今回の調査結果では３番目に低い正答率である。

(3)　代名詞

①　人称，指示，数量を表すもの

学習指導要領ではこの領域に「疑問を表すもの」が含まれているが，今回の調査結果の分類では「疑問」に関しては「疑問文」の中に含めることとした。

(32)　This book is mine.

平素，大学生を指導していて驚くことは「人称」という言葉を知らない学生に出会うことである。「１人称」「２人称」「３人称」の区別が出来ない。さらに「３人称単数現在のＳ」が「複数形のＳ（あるいは所有格のＳ）」との区別がつかない。いずれも学習内容としてかなり早い時期に導入されるため，その後の学習継続に大きな影響が出ることになる。人称代名詞の一覧表暗記は「実践的コミュニケーション能力の育成」というスローガンのもとに，授業の外に追いやられているのだろうか。(32) の正答率が29％というのは驚くべき低さである。

②　関係代名詞のうち主格の that, which, who 及び目的格の that, which の制限的用法の基本的なもの

(101) This is a book I bought in the United States.

(102) Carson is the scientist who wrote Silent Spring.

(104) This is a book that she wrote last year.

今回の調査で使用した検定教科書においては，まず（101）のような「後置修飾」を導入した後に改めて「関係代名詞」を指導するという順序になっている。しかしその定着率は（104）が45％，(101) が26％という結果から，関係代名詞を使用した文の方がより高くなっている。

（102）の正答率の低さ（18%）は，その調査に使用した文の問題も含まれている。Carson（人名），Silent Spring（本の題名）は大多数の被験者にとって馴染みが薄いものであり，さらに今回の調査項目のように一切の文脈がないと解答がより難しくなる，という事実がある。例えば（103）は主格の関係代名詞（which）を問うものであるが，正答率は56%となっており，学習の定着率を調べる問題として，（102）が必ずしも適切ではなかったと結論付けられる。今後の調査ではこのような文は削除すべきであり，他の適切な文を使用すべきである。

(4)　動詞の時制など

（89）　These girls have been here since this morning.

(1)文（②　疑問文（87））で言及した通り，「現在完了の継続用法」は調査の難しい項目であるが，“these girls” “this morning” をそれぞれ “they” “yesterday” に変えた場合に果たして同種の結果が保証されたかは疑わしいところである。調査やデータ収集に関しては，事後の課題が出そうな不確定要素を可能な限り排除し，出題のポイントを一つに絞るべきである。

(5)　to 不定詞のうち基本的なもの

（58）　I use a computer to play games.　（19%）

不定詞の用法のうち名詞的用法（59）が58%，形容詞的用法（94）が76%という正答率に対して，副詞的用法のみ19%と低い結果であったが，これは上記の通り，使用した文自体の問題によるものと考えられる。

(6)　動名詞のうち基本的なもの

（74）　Singing Christmas songs is popular.

今回２番目に低い正答率（９%）の項目である。一切の文脈がないため，状況を推測しにくい文であることは明らかである。

(7)　現在分詞及び過去分詞の形容詞としての用法

（98）　This is a picture taken about 70 years ago.

（99）　The people answering the telephones are operators.

（98）は後置修飾の文であるが，正答率は40%にとどまった。後置修飾と関係代名詞の関連性については，既に述べたように “This is a picture which was taken about 70 years ago.” と置き換えた場合の正答率を調査することで明らかにできる。その結果から「やさしい内容→難しい内容へ」という指導原則により，指導順序の変更も考えられる。現在中学校英語検定教科書は６種類あるが，全て後置修飾が先に指導され，その後に関係代名詞の学習が配列されている。しかし，主に私立中学校（特に「進学」で名高い中学校）で使用されている *Progress In English*（イエズス会）は上記の検定教科書とは異なり関係代名詞の学習を先行させ，その後に「(関係代名詞の）省略」として後置修飾の学習をさせている。どちらが学習者にとっての負担が少なくより効果的と判断できるか，今

後の研究が待たれる所である。

(99) に関しては，今回の調査において繰り返し問題となった「調査に使用する文の選択・適切性」について一番の影響が見られたものである。正答率は２％であった。

(8) 分類外　if, when, because　の節

(67) It was raining when I got up. (33%)

(68) I like Tom because he is kind. (48%)

学習者の抱える問題点をより明らかにするために，学習指導要領の分類の外に本項を設けた。if 節 (65) が63％の正答率であったのに対して，(67) (68) が共に50％を下回ったのは，「指導配列上，どのような場面で導入し，練習をし，定着をはかっているか」という問題に行き着く。「使わない（使わせない）英語は定着しない」という原則がここでも浮き彫りになる。

(9) 結果のまとめ

正答率が50％未満の項目数を学習指導要領に沿ってまとめると以下のようになる。

（ア）文（８）

（イ）文型（５）

（ウ）代名詞（４）

（エ）動詞の時制など（１）

（オ）形容詞及び副詞の比較変化

（カ）to 不定詞のうち基本的なもの（１）

（キ）動名詞のうち基本的なもの（１）

（ク）現在分詞及び過去分詞の形容詞としての用法（２）

（ケ）受け身のうち現在形及び過去形（０）

その他（２）

このことから，中学校３年間で学習する文法事項全104項目の内，24項目が習熟に関しては未達成といえる結果である。

５．困難な大学英語教育

今回の調査対象とした学習集団は，中学校・高等学校で「英語学習に関しては達成群」と必ずしも呼べる集団ではない。むしろ，英語の苦手意識の強い集団であるといえる。その中で言語適性の４つのファクター (John B. Carroll) (1) phonetic coding (2) grammatical sensitivity (3) rote memory (4) inductive reasoning を考えると，指導していく中で特に第４番目の「inductive reasoning（帰納的に英語を学習していく習慣・訓練)」が，英語学習に見られるような第２言語習得だけではなく，第１言語（母国語）の中でも極めて不足しているように思える。このことは今「大学生の学力低下」問題を抱える多くの大学でまさに直面している懸念である。ゾルタン・ドルニ

ェイ（2005）によれば「本当に外国語を習得したいと願う（すなわち，真に動機づけられている）学習者の99%は，言語適性とは関係なく，最低限，かなりの役立つ知識を身につけることができる」としている。ここで新たな問題となるのは「真に動機づけられている学習者」を我々教員がどのようにして作り出すか，学習の動機づけをどのように行うのか，という点である。一例としてドルニェイは，ウラッドコースキー（Wlodkowski）の「指導明快度測定チェックリスト（Instructional Clarity Checklist)*[2]」を「指導の質を高める要因の一覧」として紹介している。教員の指導力がこれまで以上に求められる時である。

大学生の学力低下が叫ばれて以降，既にかなりの年月が過ぎ，最近ではむしろ当然の事象として受けとめられているように思われる。多くの大学でその対応策として，教育の内容や方法を工夫することで，学生にとって学習を明確化するなどの努力がなされていることは言うまでもない。それにもかかわらず，事態はむしろ悪化し，年々，学生たちの学力と共に学習意欲自体も低下し，学問の府としての大学は存亡の危機に立たされている。

今回，我々が本研究を通じて明らかにしたかったのは，大学に入学してくる学生たちの英語に関する学力の実態である。本来，中高6年間の教育を基にさらに高度な学力を与えるのが大学の使命であると考えられるが，こと英語力に関して言えば，我々の使命は，中高6年間で身に付けさせることができなかった部分をやり直し，社会的に必要とされる程度にまで引き上げることであると考えざるを得ない。

開学以来，本学では LL 教室を積極的に利用し，音声言語に重点を置きながら「使える英語」の習得を目指してきた。現在では LL 教室は CALL 教室に改装され，マルチメディア型の教材を提供するとともに，学生が個別に利用できるコンピュータとして，与えられた課題を解いたり，レポートを作成したりするツールとしても活用できるようになっている。コンピュータに興味がある学生にとっては，英語学習に対するハードルを低くする正の効果もあるようで，一斉授業を凌ぐ，より意欲的な学習態度が見られる。

我々は英語力と学習意欲の関連性に着目し，今後さらに教育効果を上げる教材及び指導方法を開発する際の礎として，本研究が役立てられるものと確信している。

（さとう・としこ　産業情報学科）
（なかがわ・たけし　産業情報学科）
（やまな・とよみ　社会福祉学科）

謝辞

カイ２乗検定の分析プログラムについて，椎名清和氏（本学社会福祉学科）に有益な助言を戴いた。ここに深く感謝するものである。

（注）

*1　1960年後半にJames Asherの提唱した指導法で，聞いた英語に対して体全体で反応する学習法。

*2　チェックリスト

1．簡潔に説明する
2．分かりやすく説明する
3．適切な速度で教える
4．項目が理解できるまで教える
5．学習者が理解できないときにはそれに気がつくように努め，繰り返す
6．段階を追って教える
7．課題の内容とやり方を説明する
8．学習者が課題の内容とやり方を理解しているかどうか尋ねる
9．学習者が理解できないときには繰り返す
10．説明した後に，その説明を例証するために例を使う
11．説明の後に学習者に質問の時間を与える
12．次にやることに学習者がうまく取り組めるように準備させる
13．教えたり訓練するときに具体的に詳細な情報を与える
14．理解が困難なことは繰り返し説明する
15．例を用いて学習者が理解できるまで説明する
16．説明の後に学習者に考える時間を与える
17．学習方法を教える
18．宿題の内容と，それをするのに必要な教材を説明する
19．困難な箇所は強調する
20．学習活動や宿題のやり方を説明するために例を示す
21．十分な準備時間を与える
22．学習者の質問にしっかり答える
23．理解を確認するための質問をする
24．難しい課題については，学習者がやり方を理解するまで繰り返し説明する

参考文献

ゾルタン・ドルニェイ（米山朝二・関昭典　訳）（2005）『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』大修館書店

文部科学省（2003）『英語が使える日本人』の育成のための行動計画

文部科学省　中学校・高等学校学習指導要領－外国語（英語）（中学校1998年12月告示・2002年4月実施。高等学校1999年3月告示・2003年4月実施。）

Murphy, Raymond（1991）*Essential Grammar in Use.* Cambridge University Press

中川武・新沼史和（2006）「大学・短期大学におけるポートフォリオ学習を用いた英語教育」『高知

学園短期大学紀要』36，17～35.
NEW HORIZON English Course 1～3　東京書籍
日本英語検定協会　英語能力判定テスト（C）
佐藤敏子（2005）「リメディアル教育の実践―ポートフォリオ学習の有効性―」『つくば国際大学研究紀要』11，11～23.
佐藤敏子・山名豊美・中川武　（2004）「ポートフォリオ学習者における学習者の変容―自律した学習者を目指して―」『つくば国際大学研究紀要』10，31～48.
土屋澄男・広野威志（2000）『新英語科教育法入門』研究社

資料

（1）全問題項目と正答率一覧

問題項目		正答率（全体・上位群・下位群・両群差）			
(1)	I am Emi.	1.00	1.00	1.00	0.00*
(2)	You are Ms. Green.	0.91	1.00	0.85	0.15
(3)	Are you Ms. Green?	0.91	1.00	0.85	0.15
(4)	Are you from America?	0.86	1.00	0.75	0.25
(5)	I am not from Japan.	0.94	1.00	0.89	0.11
(6)	This is my country.	0.99	1.00	0.99	0.01*
(7)	That is my country.	0.91	0.94	0.89	0.05*
(8)	This is not my house.	0.86	0.96	0.79	0.17
(9)	Is this a school?	0.82	0.92	0.75	0.17
(10)	He is my friend.	0.99	1.00	0.99	0.01*
(11)	She is our teacher.	0.99	1.00	0.99	0.01*
(12)	I like music.	1.00	1.00	1.00	0.00*
(13)	I play the piano.	1.00	1.00	1.00	0.00*
(14)	Do you play the piano?	0.98	1.00	0.97	0.03*
(15)	I do not have a car.	0.54	0.68	0.44	0.24
(16)	What is this?	0.87	0.96	0.81	0.15
(17)	Cooking is interesting.	0.66	0.87	0.51	0.36
(18)	Cooking is not easy.	0.62	0.81	0.47	0.34
(19)	What do you have for breakfast?	0.87	0.92	0.83	0.09*
(20)	Two books.	0.94	0.98	0.90	0.08
(21)	Two glasses.	0.58	0.79	0.42	0.37
(22)	How many pencils do you have?	0.21	0.40	0.07	0.33
(23)	Let's have lunch.	0.94	1.00	0.90	0.10
(24)	Use this pen.	0.30	0.57	0.10	0.47
(25)	Lisa likes Japan.	0.95	1.00	0.92	0.08
(26)	Does she enjoy kabuki?	0.75	0.92	0.63	0.29
(27)	Koji does not speak Chinese.	0.73	0.91	0.60	0.31
(28)	Who is Bill?	0.97	1.00	0.94	0.06
(29)	What time is it?	0.62	0.87	0.43	0.44
(30)	Where is my CD?	0.94	1.00	0.90	0.10
(31)	Whose bag is this?	0.30	0.49	0.15	0.34
(32)	This book is mine.	0.29	0.49	0.14	0.35
(33)	Do you know him?	0.85	0.98	0.75	0.23
(34)	Do you know her?	0.84	0.98	0.74	0.24
(35)	Koji is cooking now.	0.72	0.87	0.61	0.26
(36)	Is he swimming?	0.70	0.83	0.61	0.22
(37)	What is he doing?	0.58	0.55	0.60	-0.05*

(38)	Don't drive fast.	0.22	0.28	0.17	0.11*
(39)	Please be careful.	0.86	0.98	0.76	0.22
(40)	We can see the game today.	0.75	0.94	0.61	0.33
(41)	We cannot see the game today.	0.73	0.91	0.60	0.31
(42)	Can we ride on the boat?	0.55	0.74	0.42	0.32
(43)	Can we see stars at midnight?	0.47	0.70	0.31	0.39
(44)	When can we see stars?	0.22	0.34	0.14	0.20
(45)	I walked across the bridge yesterday.	0.70	0.83	0.60	0.23
(46)	I went to school yesterday.	0.91	1.00	0.85	0.15
(47)	I studied English last week.	0.86	1.00	0.75	0.25
(48)	Did you study English yesterday?	0.95	1.00	0.92	0.08
(49)	I did not study English.	0.86	0.98	0.78	0.20
(50)	This cap was 2,000 yen last week.	0.75	0.92	0.63	0.29
(51)	Was this cap 2,000 yen last week?	0.73	0.91	0.60	0.31
(52)	I was reading a book then.	0.73	0.91	0.60	0.31
(53)	You look happy.	0.67	0.89	0.51	0.38
(54)	I am going to visit Tokyo tomorrow.	0.63	0.75	0.54	0.21
(55)	Are you going to visit Tokyo tomorrow?	0.70	0.77	0.64	0.13*
(56)	Show me your passport, please.	0.52	0.60	0.46	0.14*
(57)	We call him Tom.	0.51	0.57	0.47	0.10*
(58)	I use a computer to play games.	0.19	0.28	0.13	0.15
(59)	I want to find some friends.	0.58	0.75	0.46	0.29
(60)	I have to speak English now.	0.90	1.00	0.82	0.18
(61)	I do not have to speak English now.	0.62	0.79	0.50	0.29
(62)	I will show you her picture tomorrow.	0.51	0.81	0.29	0.52
(63)	You must help your mother.	0.78	0.91	0.69	0.22
(64)	You must not eat too much.	0.77	0.92	0.65	0.27
(65)	Please call me if you can go.	0.63	0.85	0.47	0.38
(66)	I think we have to leave soon.	0.30	0.49	0.15	0.34
(67)	It was raining when I got up.	0.33	0.54	0.18	0.36
(68)	I like Tom because he is kind.	0.48	0.77	0.26	0.51
(69)	There is a present under the tree.	0.38	0.57	0.25	0.32
(70)	There are some friends in the room.	0.74	0.91	0.63	0.28
(71)	Is there anything interesting in the shop?	0.51	0.74	0.35	0.39
(72)	No, there is not.	0.61	0.75	0.50	0.25
(73)	I finished writing this poem.	0.52	0.79	0.32	0.47
(74)	Singing Christmas songs is popular.	0.09	0.17	0.03	0.14
(75)	America is bigger than Japan.	0.57	0.81	0.39	0.42
(76)	Mt.Fuji is the highest of all mountains in Japan.	0.52	0.64	0.43	0.21
(77)	This movie is more interesting than that one.	0.51	0.77	0.32	0.45
(78)	This movie is the most interesting this year.	0.54	0.77	0.36	0.41

(79)	Emi is my best friend.	0.72	0.79	0.67	0.12*
(80)	Taro is as tall as Ken.	0.78	0.94	0.65	0.29
(81)	Instant noodle is eaten by many people.	0.61	0.79	0.47	0.32
(82)	Instant noodle was invented by Japanese.	0.65	0.85	0.50	0.35
(83)	Was instant noodle invented by Japanese?	0.58	0.79	0.42	0.37
(84)	The letters make us happy.	0.42	0.51	0.36	0.15
(85)	I have lived in Japan for five years.	0.62	0.89	0.49	0.40
(86)	She has lived in Japan for seven years.	0.61	0.89	0.40	0.49
(87)	Have you played the piano for ten years?	0.38	0.57	0.25	0.32
(88)	How long have you played the piano?	0.37	0.60	0.19	0.41
(89)	These girls have been here since this morning.	0.41	0.66	0.22	0.44
(90)	Have you ever heard of a greenhouse problem?	0.86	0.94	0.79	0.15
(91)	I have never heard of a greenhouse problem.	0.90	0.98	0.83	0.15
(92)	I have just finished my work.	0.78	0.87	0.72	0.15
(93)	Have you finished your work yet?	0.62	0.81	0.47	0.34
(94)	I have a lot of work to do.	0.76	0.81	0.72	0.09*
(95)	We are glad to have a chance.	0.62	0.72	0.54	0.18
(96)	I know how to use a fan.	0.52	0.75	0.35	0.40
(97)	It is difficult for me to understand Japanese.	0.15	0.25	0.08	0.17
(98)	This is a picture taken about 70 years ago.	0.40	0.49	0.33	0.16
(99)	The people answering the telephones are operators.	0.02	0.04	0.01	0.03*
(100)	I do not know what you mean.	0.43	0.64	0.28	0.36
(101)	This is a book I bought in the United States.	0.26	0.38	0.17	0.21
(102)	Carson is the scientist who wrote Silent Spring.	0.18	0.34	0.06	0.28
(103)	I like movies which make me happy.	0.56	0.77	0.40	0.37
(104)	This is a book that she wrote last year.	0.45	0.70	0.26	0.44

＊アステリスクは「上位・下位群間の有意差なし（クロス集計に基づいたカイ２乗検定による）」を意味する。

（２）基礎統計

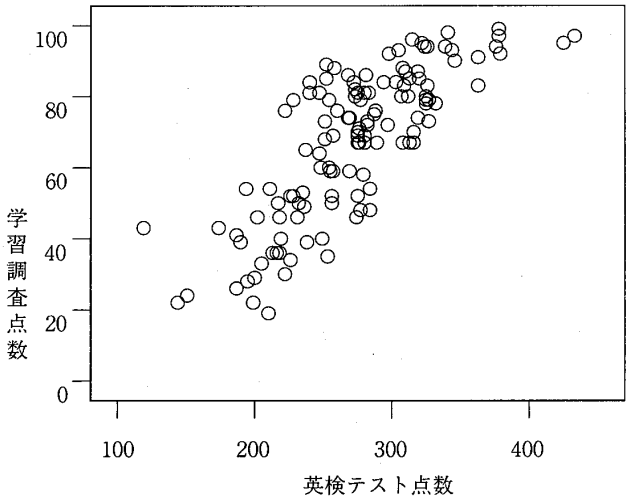
	度数	範囲	最小値	最大値	平均値		標準偏差
	統計量	統計量	統計量	統計量	統計量	標準誤差	統計量
学習調査点数	125	80	19	99	66.98	1.867	20.871
英検テスト点数	125	314	119	433	272.42	4.838	54.093
有効なケースの数（リストごと）	125						

（3）相関関係

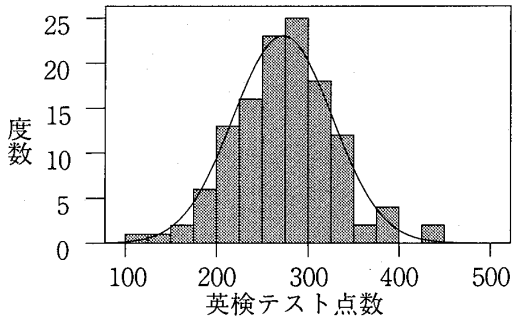
			学習調査点数
Spearman	英検テスト点数	相関係数	.769(**)
		有意確率（両側）	.000
		N	125

** 1％水準で有意（両側）

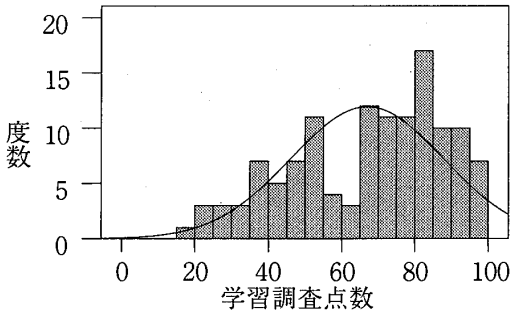
（4）分布図



（5）英検テストによるヒストグラム



（6）学習調査によるヒストグラム



Research of the University-level Learners' Ability of English: Where Do They Stumble?

Toshiko Sato, Takeshi Nakagawa and Toyomi Yamana

The purpose of this study is to find out where the Japanese university-level learners are baffled in their process of learning English. The research plans are;

(1) carrying out a placement test in the beginning of the course,

(2) classifying them into the right level of the class (upper or lower),

(3) drawing up a 12 set of tests (104 items in total) and collecting the data, and

(4) scoring their responses and making an analysis, based on "The Course of Study for Lower Secondary School by MEXT (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology)".

The 104 question items come from the target sentences of a junior high school textbook, which is one of the six textbooks approved by MEXT. They are laid out by the level of difficulty, so that we can illuminate where the testees collapse.

These are the grammatical elements which show less than 50% of correctness, and the figure in the parenthesis says the number of the question items;

(1) sentences (8)

(2) sentence patterns (5)

(3) pronouns (4)

(4) verb tenses (1)

(5) basic to-infinitives (1)

(6) basic gerunds (1)

(7) adjectival use of present and past participles (2)

(8) others (2).

This results concludes that the learners had a tremendous struggle in the earlier stage of their learning process. With having no hope for a restart, their unwillingness of mastering English gets an increase, even misleading them into losing their self-assurance. Our next mission is to set up a tactical curriculum which enables a succeeding of English learning, by assessing a class-size, teaching materials/methods, evaluations and to motivate the learners.

Key words: grammar, motivation, remedial education, textbook, the course of study

本論文は大学生レベルの英語学習者がそれまでの学習においてどこでつまずいたかを明らかにするための考察である。調査は被験者を年度開始時のプレイスメントテストによって上位と下位の２レベルに分けることから始まり，中学校検定済教科書を下地に作成した全104項目からなる「並べ替えテスト」を計12回実施しデータを収集，分析した。さらに学習指導要領の分類例に従い，学習者がどの学習項目において習得の不足を示しているかを詳細に分析した。その結果24項目において正答率が50％を割り，学習の初期段階において既につまずきが見られることや，その後の学力格差が拡大している現状が明らかとなった。